

表3：出産の希望と、参加者の各種背景との関係（高校生）

			人数		割合(%)		オッズ比		
			子供を持 ちたい	子供を持 ちたくない	子供を持 ちたい	子供を持 ちたくない	OR	95%CI	p
経済関連	経済不安	弱い	210	22	90.5	9.5	0.565	0.30-1.052	0.1
		普通	338	20	94.4	5.6	1		
		強い	674	74	90.1	9.9	0.539	0.325-0.894	0.016*
	実家経済力	高い	180	9	95.2	4.8	1.919	0.949-3.876	0.071
		普通	667	64	91.2	8.8	1		
健康関連	健康状態	低い	375	43	89.7	10.3	0.837	0.558-1.254	0.4
		良い	799	63	92.7	7.3	1.258	0.772-2.049	0.359
		普通	242	24	91.0	9.0	1		
	健康への関心	悪い	181	29	86.2	13.8	0.619	0.351-1.093	0.108
		高い	796	73	91.6	8.4	0.748	0.446-1.256	0.319
		普通	277	19	93.6	6.4	1		
		低い	149	24	86.1	13.9	0.426	0.228-0.797	0.012*
食生活	主食主菜副菜の 揃った食事	1日2回	577	51	91.9	8.1	0.994	0.620-1.594	1
		1日1回	330	29	91.9	8.1	1		
		1日1回未満	315	36	89.7	10.3	0.773	0.495-1.207	0.292
仕事と家庭	結婚して仕事 を...	変えない	629	54	92.1	7.9	1		
		家庭優先	428	22	95.1	4.9	1.67	1.007-2.770	0.052
		辞める	18	1	94.7	5.3	1.545	0.257-9.222	1
		わからない	147	39	79.0	21.0	0.324	0.207-0.506	<0.001**

*p < 0.05 **p < 0.01

表4：出産の希望と、参加者の各種背景との関係（大学生）

			人数		割合(%)		オッズ比		
			子供を持 ちたい	子供を持 ちたくない	子供を持 ちたい	子供を持 ちたくない	OR	95%CI	p
経済関連	経済不安	弱い	273	12	95.8	4.2	1.21	0.524-2.798	0.664
		普通	188	10	94.9	5.1	1		
		強い	506	34	93.7	6.3	0.792	0.389-1.613	0.602
	実家経済力	高い	220	6	97.3	2.7	2	0.835-4.782	0.173
		普通	495	27	94.8	5.2	1		
健康関連	健康状態	低い	252	23	91.6	8.4	0.598	0.338-1.057	0.091
		良い	653	32	95.3	4.7	1.148	0.546-2.417	0.69
		普通	160	9	94.7	5.3	1		
	健康への関心	悪い	154	15	91.1	8.9	0.578	0.251-1.332	0.213
		高い	799	33	96.0	4.0	2.794	1.415-5.522	0.008*
		普通	104	12	89.7	10.3	1		
		低い	64	11	85.3	14.7	0.671	0.285-1.581	0.373
食生活	主食主菜副菜の 揃った食事	1日2回	232	14	94.3	5.7	1.175	0.583-2.366	0.721
		1日1回	268	19	93.4	6.6	1		
		1日1回未満	467	23	95.3	4.7	1.439	0.776-2.670	0.254
仕事と家庭	結婚して仕事 を...	変えない	442	32	93.2	6.8	1		
		家庭優先	416	14	96.7	3.3	2.151	1.142-4.049	0.022*
		辞める	26	4	86.7	13.3	0.471	0.161-1.364	0.259
		わからない	83	6	93.3	6.7	1.002	0.416-2.406	1

*p < 0.05 **p < 0.01

D. 考察

晩婚化・少子化が進む我が国においても、高校生・大学生の意識は、結婚・挙児を希望する者が大多数であり、結婚や出産を避ける傾向があるわけではないことが、今回の調査でわかった。また、高校生よりも大学生のほうが、若干ではあるが結婚・挙児を希望する者の割合が男女ともに高く、少なくともこの時期においては、年齢が上がるにつれ、結婚・挙児希望が下がるわけではないことがわかった。結婚をしたい年齢については、高校生と大学生の間には大きな違いは無く、男女ともに 25 歳前後であったが、はじめての子供を持ちたい年齢については、大学生の方が高い年齢であり、挙児を先延ばしする傾向がみられた。特に男子大学生において、その傾向が強く示された。男性においては、晩婚化への意識傾向は、大学生の時期から出現するのも知れない。なぜ、結婚を先延ばしするわけでもないのに、挙児を先延ばしする傾向があらわれるのかについて、さらなる詳細な調査検討が必要と思われる。今回の調査では、高校生・大学生ともに、結婚や挙児を希望するものが大多数である一方、自分の人生における「子育て」の優先度は、際だって低いことが示された。これは、高校生・大学生共に、将来の子育てに関するイメージが十分に持っていないことが原因ではないかと推察される。また、多くの高校生・大学生が、将来の「子育て」に対して不安を抱いており、不安の要素として経済的な不安をあげるものが最も多かった。次に、知識や情報不足から来る不安をあげる者が多かったが、これは高校生よりも大学生の方が多かった。

高校生・大学生における、不妊、妊孕力、不妊治療に関する知識はおしなべて低い、いずれも、高校生より大学生、男性より女性の方が、知識を有していると思われる人数の割合は比較的高いことが示された。高校生では、自分が 30 歳までに最初の子供を出産すると答えた者が 84.2%である

ことから、大多数の高校生が晩産に至るイメージを持っていないと考えられる。したがって、高校生の時点で、不妊や妊孕力の低下について教えることは、あまり効果がないと推察され、大学生や、社会人になってからの方が、これらの知識や情報を伝える時期としては適切であろう。

結婚希望に影響を与える各種背景について分析したところ、高校生においては、実家経済力の影響を強く受ける一方、大学生においては、将来への経済不安の影響が強くなることがわかった。親元にいることが多い高校生と、自立の途上にある大学生という立場の違いを反映しているものと思われるが、いずれにせよ、経済的背景は、結婚を希望する者の割合に影響を与えていることが示された。健康関連の質問において、高校生では一定の傾向を見いだすことはできないが、大学生では、健康状態、健康への関心が高いほど、結婚を希望する者の割合が高くなるという傾向が見られた。

一方、挙児希望に影響を与える各種背景について分析したところ、結婚希望と同様に、高校生では、実家経済力の影響を強く受け、大学生では、将来への経済不安、実家経済力の影響を強く受けることがわかった。健康関連と挙児希望の関係においても、大学生の方が、健康状態や健康への関心と挙児希望の間に関連性が見いだされた。

E. 結論

若者に対して、結婚や出産に対して前向きな気持ちを持ってもらおうというアプローチを取るとすれば、高校生よりも、結婚や挙児への意識と、自身の経済や健康の関連性がはっきりしてくる大学生の時期に行うことが有効であると考えられる。また、その際には、今後起こりうる経済的な不安を適切に受け止める力や、自らの身体に起こる変化に対する正確な知識、将来のキャリアデザインを描くための知識などを提供する全人的な教育と組

み合わせて実施する工夫が有用であろうと考えられた。

【参考文献】

1. 厚生労働省ホームページ平成 25 年人口動態統計月報年計(概数)の概況
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai12/>)

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 高校生を対象とした結婚、出産についての意識調査－保健の授業で何を教えるべきか？ 西尾彰泰, 堀田亮, 佐渡忠洋, 吉川弘明, 足立由美, 松浦賢長, 林芙美, 山本眞由美. 東海学校保健研究: Tokai Journal of School Health; 第 39 卷 1 号(査読中)
- 2) 大学生における結婚、出産についての意識調査－大学の健康教育で何を教えるべきか？ 西尾彰泰, 堀田亮, 佐渡忠洋, 吉川弘明, 足立由美, 松浦賢長, 猪飼周平, 高田昌代, 林芙美, 加納亜紀, 磯村有希, 山本眞由美. CAMPUS HEALTH; 52(1)(投稿中)

2. 学会発表

- 1) 高校生を対象とした結婚、出産についての意識調査－保健の授業で何を教えるべきか？－, 西尾彰泰, 堀田亮, 佐渡忠洋, 吉川弘明, 足立由美, 松浦賢長, 林芙美, 山本眞由美. 第 57 回東海学校保健学会総会 於 じゅうろくプラザ(岐阜) 2014.9.6
- 2) 大学生における結婚、出産についての意識調査－大学の健康教育で何を教えるべきか？ 西尾彰泰, 堀田亮, 佐渡忠洋, 吉川弘明, 足立由美, 松浦賢長, 猪飼周平, 高田昌代, 林芙美, 加納亜紀, 磯村有希, 山

本眞由美. 第 52 回全国大学保健管理研究集会 於 慶應大学三田キャンパス西校舎ホール 2014.9.3～4

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

「若い男女における結婚、出産についての意識調査」の解析
－ 「子どもが欲しい」という回答をもたらす因子についての検討 －

研究分担者 吉川 弘明 （金沢大学保健管理センター）

研究協力者 足立 由美 （金沢大学保健管理センター）

平成 25 年度に実施した「若い男女における結婚、出産についての意識調査」について、「子どもが欲しい」もしくは「子どもが欲しくない」という選択式の回答から解析を行った結果、結婚に対する希望と強い関連があることがわかった。また、自分の育った家庭環境への肯定感、食卓が明るく心地よかったという記憶と、将来子どもが欲しいと意識することは関連があることがわかった。部活動に参加すること、子どもが欲しいこととも関連があった。一方、飲酒、喫煙、日常的な運動の有無は関連がなかった。高校生と大学生を分けて解析したが、これらの結果は同じであった。現在の健康状態の程度と子どもが欲しいか否かは関連はないものの、健康への関心が高いものが子どもが欲しいと思うという関連が大学生において見られた。今回の調査から高校や大学における健康教育、食育、コミュニケーション教育を考える上で重要な示唆が得られた。

A. 研究目的

日本の将来を担う若い世代における意識調査として、当班では平成 25 年度に『若い男女における結婚、出産についての意識調査』に関するアンケート(以下「若い男女に関するアンケート」)(資料 1)を実施した。この調査は、高校生と大学生における生活の実態と現状の認識、食事・栄養、結婚・出産に関するアンケート調査である。この研究では、アンケートの集計データを用い、将来、結婚と子どもを持つことを方向づける因子を解析することが目的である。

B. 研究方法

平成 25 年度に当班構成メンバーの所属する大学、もしくは関係する高校と大学において、当班で作成した「若い男女に関するアンケート」を実施した。アンケートは印刷された用紙に自己記入する形式を採用し、各大学・高校ごとに実施・回収した後、岐阜大学保健管理センターでスプレッドシ

ートに入力した。アンケートは個人が特定できない無記名式であり、アンケートに答えるか否かは個人の自由とした。

統計解析は、主な調査項目に関して1変量の解析を行って、データの分布を見た後、「子どもが欲しい」、「子どもは欲しくない」の 2 者択一の質問(資料 1:質問 4-4)によりパーティション解析(ディジジョンツリー、決定木)による探索的検討を行った。統計解析ソフトウェアとして JMP ver.11 (SAS Institute, Japan)を使用した。

(倫理面への配慮)

調査に際しては岐阜大学倫理審査委員会と金沢大学医学倫理審査委員会の審査・承認を経て実施した。なお、データには名前等が特定できる個人情報含まれていない。また、協力を希望しない学生に対して、授業等で不利益が生じないように配慮した。

C. 研究結果

データ総数は 3,055 件であった。この中で性別が不明な 39 件を除外し、本人の年齢が 12 歳未満、本人が生まれた時の父親もしくは母親の年齢が 16 歳未満、65 歳以上、もしくは無回答の例を除外し、合計 2,116 件について解析を行った(高校生 1156 人;男性 724 人、女性 432 人、大学生 960 人;男性 232 人、女性 728 人)。なお、解析は高校生と大学生を分けて行った。また、解析を単純化するため、質問の回答によって、さらに質問を重ねる入れ子型の調査項目は除外した。女性に限って回答を求めた質問項目 5 以下については、除外した。また、特に高校生において学部別の分類が当てはまらなかったため、全体の解析からこのカテゴリーは除外した。

以下、質問 4-4「あなたは、将来、子どもが欲しいと思っていますか?」に関する回答「1. 子どもは欲しくない」「2. 子どもが欲しい」に注目し、回答結果を解析した。

高校生と大学生別に、目的変数を 1. 子どもが欲しい、2. 子どもは欲しくない、のカテゴリーとして、パーティション解析を行った(図 1)。高校生は「子どもが欲しい」、「子どもが欲しくない」は「いずれ結婚するつもり」とそれ以外の結婚意識の影響を受ける。さらに、過去6ヶ月に「歩く」程度の運動を1時間以上していたことも「子どもが欲しい」に関連することが分かった。一方、「結婚するつもりはない」という回答は、「子どもは欲しくない」という回答と関連していることがわかった。高校生に関して、「子どもが欲しい」と「いずれ結婚するつもり」との回答にはカイ 2 乗検定の結果、相関があることがわかった($p < 0.0001$) (表1)。

大学生においても「子どもが欲しい」か「子どもが欲しくない」かのカテゴリーによるパーティション解析を行ったところ、同様に「結婚するつもり」とそれ以外「一生結婚するつもりはない、考えたこともない」で分枝することがわかった(図 2)。子どもが欲しいと答えた群はさらに仕事と育児の両立を望ん

でいることがわかる。大学生においても、「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」にはカイ 2 乗検定で関係が見られた($p < 0.0001$) (表 2)。

次にいくつかの質問項目に関して、「子どもがほしい」との関連を検討した。質問 4-12「自分の育ったような家庭を自分も築きたいか」に関し、回答「1. 思う、2. 思わない、3. わからない」で子どもが欲しい、欲しくないとの関連を名義ロジスティック解析をしたところ、自分の育ったような家庭を築きたいことと、子どもが欲しいとは関連があることがわかった(高校生; $p < 0.0001$, 大学生; $p < 0.0001$)。

また、質問 3-6「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」に関して、子どもが欲しいとの関連をみたところ、食事が楽しかったと答えることと、子どもが欲しいと回答することには関連があることがわかった(高校生; $p < 0.0001$ 、大学生; $p < 0.005$)。

部活動に関しては、質問 2-3 で「していた」、「していない」の 2 択で質問をしているが、名義ロジスティック解析の結果、高校生、大学生ともに、部活動をしていたことと子供が欲しいこととは関連があった(高校生: $p < 0.0002$ 、大学生; $p < 0.0001$)。しかし、飲酒の有無、喫煙の有無と子どもが欲しいこととは関連はなかった。

質問 2-13 の「自分の健康状態」に関しては、高校生も大学生も「子どもが欲しい」という意識との関連はなかった。一方、質問 2-14「自分の健康に関する関心」では、高校生では関係はなかったものの大学生において、自分の健康に関心があることと、子どもが欲しいと思うことの関連があった($p < 0.0005$)。

D. 考察

平成 25 年度実施「若い男女における結婚、出産についての意識調査」を「子どもが欲しい」、「欲しくない」という回答に注目して解析をした結果、結婚に関して「将来、結婚するつもりである」という回答と高い関連があった。また、「自分が育ったよ

うな家庭を築きたい」、「自分の家は、食事が楽しく心地良かった」という育った家庭環境が良好であった場合に「子どもがほしい」と思わせることがわかった。これらの関連は、高校生と大学生で同様であった。育った環境が将来の家庭や子どもに対する希望を左右するというは、家庭という最小単位のコミュニティのあり方を考える上で、重要な示唆を、我々に与えてくれる。部活動に関しては、高校生も大学生も部活動をするということと子どもを欲しいと思うことに関連があった。他人との関わり合いの中で、自己を知ることは、基本的に重要なことであることをうかがわせる。すなわち、我々の感じる自己の概念は他人との関係性の中で生まれるものである。そのことに気づき、また他人との関係性の中に生きること喜びを感じることは、健全なコミュニティ、さらには機能的な社会の形成のために不可欠なものである。

健康に関する因子の中では、喫煙、飲酒に関しては、子どもが欲しいことと関係がなく、現在の健康状態も関連はなかった。今回の調査対象がヒトとしての生活歴のなかで、もっとも体力が充実した高校生、大学生であったために、体調の不調を意識することがないためと考えられる。しかし、大学生のみの結果ではあるが、健康への関心と子どもが欲しいとの間に関連があることがわかった。この世代において健康への意識を持つということは、中高年の場合とは違い、より良く生きたい、もっと自分の可能性を広げていきたいという前向きな姿勢のあらわれと思われ、自分の未来を明るいものと考えている可能性がある。そのような希望を持った大学生が、実際に自分の育った家庭の良いイメージを持っていた場合、明るい家庭を持ちたい、子どもがほしい、母親や父親の役割を自分の両親と同じようにしてみたいと思うのは自然なことと思われる。また、大学生においては「子どもが欲しい」ということと仕事と育児の両立を望むことは関連があり、社会政策的にもこのような希望をかなえるよう

な仕組み作りが必要であろう。今回の解析の結果は、ある程度、予想できるものであるが、実際のアンケート調査の結果として確認できた意義は大きい。今後、高校や大学における健康教育、食育、コミュニケーション教育のあり方を考える上で、重要なデータが得られたものと考えられる。

E. 結論

「子どもが欲しい」という意識は、「結婚するつもり」という希望と強く関連づいていることがわかった。また、自分が育った家庭環境への肯定感、楽しい食卓、部活動の経験は、「子どもが欲しい」という意識に繋がるものであることがわかった。さらに、大学生においては仕事と育児の両立を望む群が「子どもが欲しい」と考えていることから、社会政策として仕事と育児の両立が可能な環境を提供することが重要になってくると考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 吉川弘明、足立由美: ライフプランを含む教育用パンフレットに対する評価と大学生への健康教育—大学生の健康教育へのニーズと必要性— 金沢大学保健管理センター年報・紀要 No.7(通巻 41) 68 - 75, 2015.

2. 学会発表

- 1) 吉川弘明、足立由美、山本眞由美、西尾彰泰、佐渡忠洋、堀田亮: 教育用パンフレット「知っていますか? 男性のからだのこと、女性のからだのこと」に対する大学生の意識調査 第 56 回日本教育心理学会総会 於神戸、2014.11.7~9
- 2) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、猪飼周平、高田昌代、林芙美、加納亜紀、磯村有希、山本眞由美 大学生における結婚、出産についての意識調査—大学の健康教育で何を教えるべき

- か? - 第 52 回全国大学保健管理研究集会 東京、2014.9.3~4
- 3) 西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、林芙美、山本眞由美
高校生を対象とした結婚、出産についての意識調査 - 保健の授業で何を教えるべきか? - 第 57 回東海学校保健学会 岐阜、2014.9.6
- 4) 林芙美、西尾彰泰、堀田亮、佐渡忠洋、吉川弘明、足立由美、松浦賢長、山本眞由美: 高校生・大学生における将来の結婚や子どもを持つことに対する意識と現在の食知識、食習慣、食に関する主観的 QOL の関
- 連について。第 61 回 一般社団法人 日本学校保健学会 学術大会、金沢、2014.11.15~16.
- G. 知的財産権の出願・登録状況
1. 特許取得 なし
 2. 実用新案登録 なし
 3. その他 なし
- H. 添付資料
1. 若い男女における結婚、出産についての意識調査

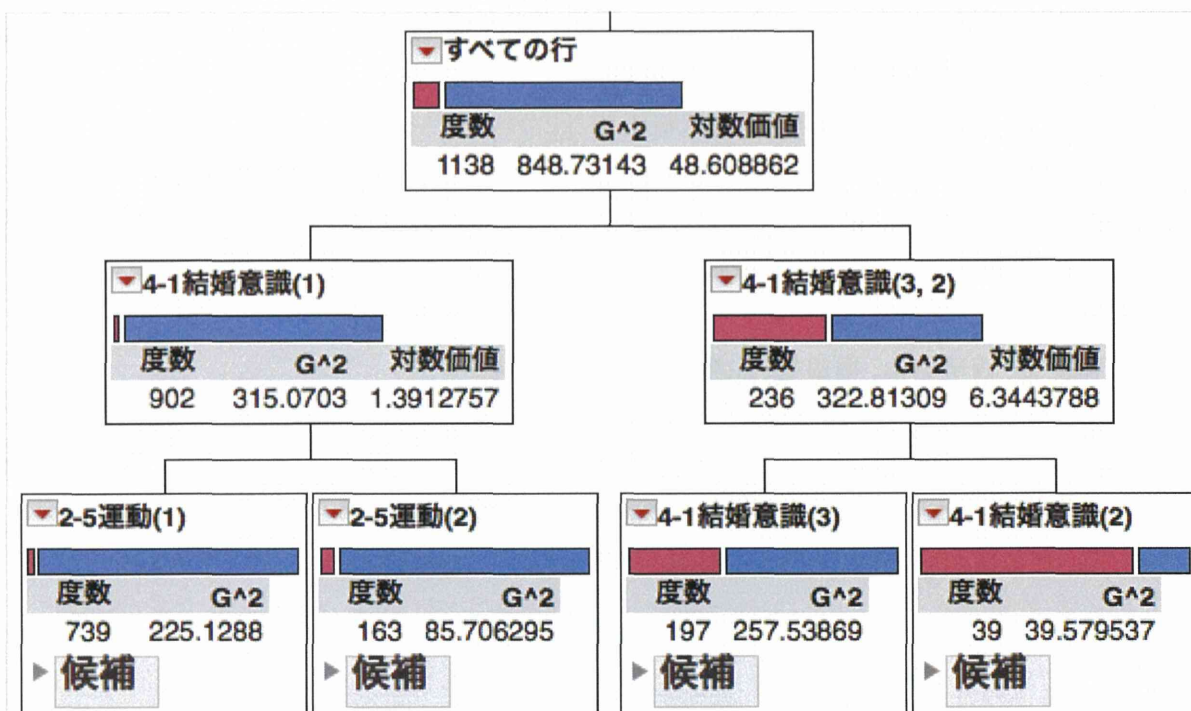


図1 高校生の1.子どもが欲しい、2.子どもは欲しくない、の категорияで分枝させたパーティション解析

子どもが欲しいか欲しくないかを特徴づけるのは、まず1) 結婚意識(結婚したい)と思うか否かが大きな要素となる(最初の分枝)。すなわち、子どもが欲しいと思う群は「1」いずれ結婚するつもり」と回答、子どもが欲しくない群は「2」一生結婚するつもりはない」もしくは「3」考えたことがない」と回答している。さらに子どもが欲しいと思う群が、次に分枝する要素は「歩く」程度の身体活動を6ヶ月間以上続けていることである。横棒グラフの青は「子どもが欲しい」と回答した者、赤は「子どもは欲しくない」と回答した者の比率を示す。

n (%)	いずれ結婚するつもり	一生結婚するつもりはない	考えたことがない	計
子どもは欲しくない	38 (3.35)	31 (2.74)	71 (6.27)	140 (12.36)
子どもは欲しい	880 (75.90)	18 (0.71)	125 (11.03)	993 (87.64)
χ ² 検定				p<0.0001

表1.「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」のカイ2乗検定(高校生)

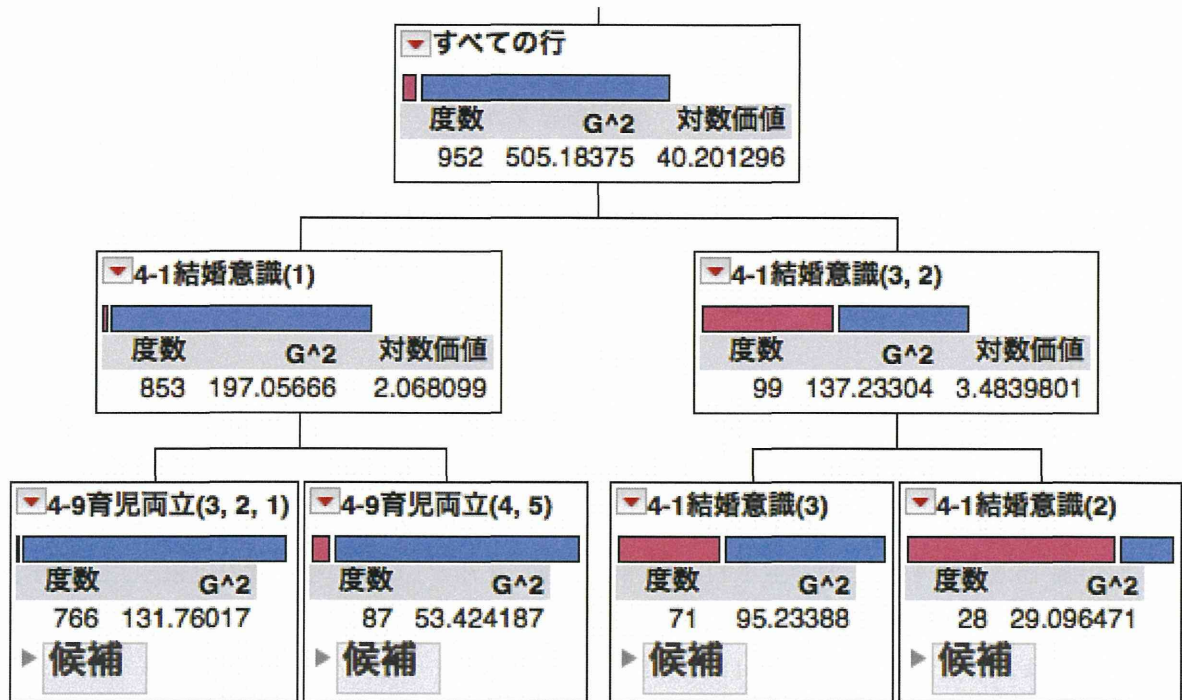


図2 大学生の1.子どもが欲しい、2.子どもは欲しくない、のカテゴリーで分枝させたパーティション解析
 子どもが欲しいという群は、「1」いずれ結婚するつもり」と回答し、さらに仕事と育児の両立を望んでいる者たちである。一方、「子どもは欲しくない」と回答した群は、「2」一生結婚するつもりはない」と回答する者の割合が多かった。横棒グラフの青は「子どもが欲しい」と回答した者、赤は「子どもは欲しくない」と回答した者の比率を示す。

n (%)	いずれ結婚するつもり	一生結婚するつもりはない	考えたことがない	計
子どもは欲しくない	19 (2.02)	22 (2.34)	28 (298)	69 (7.34)
子どもは欲しい	822 (87.45)	6 (0.64)	43 (4.57)	871 (92.66)
χ ² 検定				p<0.0001

表2.「子どもが欲しい」と「結婚するつもり」のカイ 2 乗検定(大学生)

結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理

— 質問紙結果から —

研究協力者 佐渡 忠洋（常葉大学健康プロデュース学部）
研究協力者 堀田 亮（岐阜大学保健管理センター）
研究分担者 西尾 彰泰（岐阜大学保健管理センター）

結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理を探索的に検討するために、本研究では、平成 25 年度に本研究班が実施した大規模質問紙調査の結果を再度分析した。最初に、心理学的検討に値する項目に着目し、調査で得られた結果を 4 カテゴリー 26 項目に整理して、高校生 1,673 名（平均年齢 16.5 ± 0.74 歳）、大学生 1,118 名（平均年齢 19.75 ± 1.09 歳）を分析の対象とした。まず、26 項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、21 項目に差が認められ、結婚と子どもを持つことを望む者は大学生に多かった。さらに、高校生と大学生のデータを、それぞれクラスター分析で検討した結果、高校生と大学生とでは質を異にするクラスターが導き出され、社会観や家族観は男女で異なることが示唆された。特に大学生では、男性は社会的な活動に意識が向き、女性は結婚と子どもを持つことに加え、家族や家庭に意識が向いていることが示された。したがって、今後は年齢と性差を考慮して、本研究班が集積してきたデータを分析していく必要性が明らかになった。

A. 研究目的

日本が抱える少子化と晩婚化などの問題は、解決困難なものである。容易に解決できるものであれば、これほどまでに問題視されることはなかっただろう。しかし、個人の幸福のみならず、社会の発展を重んじるならば、本問題の探求は続けるべきである。本研究グループは、そうした社会的要請に何らかの形で応えるために組織されたと言っても過言ではない。

厚生労働省科学研究費補助金を受けたわれわれは、本事業の中核に、高校生と大学生に対してライフプランを考える機会を提供することを据えてきた。すなわち、結婚したいと考え、子どもを持ちたいと考えている若者に、教育的介入を行うことで、当の若者たちが自らのライフプランが実現できるように支援することが、先述した問題に対して現実的に応える一つの方略であると

考えてきた。そのために、平成 25 年度は全国的なアンケート調査を行うことで仮説の生成に務め、平成 26 年度は DVD 教材を独自に作成し、教育的介入の効果を実証的に検討した。

本事業に対して心理学が貢献できる領域は甚だ限られている。というのも、心理学は主として個を扱う学問であるから、政策や社会へ如何にして介入していくかという直接的な理論を十分有していないためである。しかし、結婚を望むことや子どもを望むことに関連した心理学的な事柄を探求することに関しては、十分貢献できると考えられる。

そこで本研究は、平成 25 年度に実施した大規模質問紙調査の結果を、これまでとは異なる観点から検討することで、結婚を望む若者、子どもを持つことを望む若者の心理に接近しようと考えた。なお、この質問紙の結果は、すでに昨

年度の報告書において基礎的な分析を行い、まとめて報告しているものである(山本ら,2014)。

B.研究方法

1. 対象と手続き

対象は、全国の高校生 1,866 名(6 校)、および大学生 1,189 名(11 大学)の、計 3,055 名である。

調査は 2013 年 9 月～2014 年 2 月に行った。対象者に本研究班が作成した質問紙(資料 1)を配布し、自己記入式での回答を求め、回答終了後に回収した。

(倫理面への配慮)

本研究の実施にあたっては、岐阜大学医学部の医学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 25-268)。

2. 結果の整理

得られた質問紙法の結果の中で、心理学的検討に値する質問項目を抽出して、再度結果を整理した。整理した手段は、表 1 に記した。その結果、4 カテゴリー計 26 項目の項目で以後の検討を進めることになった。対象者の各項目の回答は、必ず「該当する」か「該当しない」のいずれかに分類できる形になっている。

検討は高校生と大学生とを分けて行っていく。質問紙の結果を整理する上で、回答に不備があったデータと、年齢幅を統制するために大学生の場合は 25 歳以上のデータは除外した。その結果、高校生は男性が 1,011 名、女性が 662 名、計 1,673 名(平均年齢 16.5 ± 0.74 歳)が、大学生は男性が 247 名、女性が 856 名、計 1,118 名(平均年齢 19.75 ± 1.09 歳)が検討の対象となった。以下、これを整理データと呼ぶ。

3. 分析

データは、「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」に特に注目しつつ、ま

ずは高校生と大学生とで整理データの出現度数に差があるかを検討する。そのために、高校生と大学生の出現度数を、カイ二乗検定を用いて比較した。

次に、高校生と大学生とそれぞれで、整理データの項目間の類似・近似関係を検討する。そのために、整理データの各項目に「該当する」場合には 1 を、「該当しない」場合には 2 を与え、階層クラスター分析(word 法)を用いて分析した。

なお、統計分析には PASW(SPSS) ver.18 を使い、カイ二乗検定では p 値が 0.05 以下を有意差ありと判断した。

C.研究結果

1. 高校生と大学生との比較

整理データの出現度数を、高校生と大学生とで比較した結果、26 項目中 21 項目に有意差認められた(表 2)。

2. 高校生の整理データにおける項目間関係

高校生のクラスター分析で導き出されたテンドログラムを図 1 に示した。本図を読み込んで、3 つのクラスターを抽出し、順に《高クラスター I 》、《高クラスター II 》、《高クラスター III 》と名付けた。

3. 大学生の整理データにおける項目間関係

学生のクラスター分析で導き出されたテンドログラムを図 2 に示した。本図を読み込んで、3 つのクラスターを抽出し、順に《大クラスター I 》、《大クラスター II 》、《大クラスター III 》と名付けた。

表1 平成25年度質問紙調査結果の整理項目（整理する方法と基準）

A. 基本情報

- A1：男性（Q1-2で「男性」と回答）
- A2：女性（Q1-2で「女性」と回答）
- A3：実家に父親がいる（Q1-7で「父」を選択）
- A4：実家に母親がいる（Q1-7で「母」を選択）
- A5：実家にきょうだいがいる（Q1-7で「兄」「姉」「弟」「妹」のいずれかを選択）
- A6：家の経済状態はよい（Q2-11で「上」か「中の上」を選択）
- A7：自分の健康に関心がある（Q2-14で「非常に関心がある」か「まあ関心がある」を選択）

B. 食事・生活

- B1：1年以内に部活をしていた（Q2-3より）
- B2：食事時間が楽しい（Q3-1-aで「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選択）
- B3：食卓の雰囲気は明るい（Q3-1-cで「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選択）
- B4：体型が気になる（Q2-7で「非常に気になる」か「やや気になる」を選択）

C. 人生の中で重視すること（Q2-10-a～kで無回答は該当しないと考えた）。

- C1：人生で勉強が重要（Q2-10-aで3位以上と位置付けた）
- C2：人生で仕事・アルバイトが重要（Q2-10-bで3位以上と位置付けた）
- C3：人生で円満な家庭が重要（Q2-10-cで3位以上と位置付けた）
- C4：人生で趣味やスポーツが重要（Q2-10-dで3位以上と位置付けた）
- C5：人生で健康な体が重要（Q2-10-eで3位以上と位置付けた）
- C6：人生で友人付き合いが重要（Q2-10-fで3位以上と位置付けた）
- C7：人生で異性との付き合いが重要（Q2-10-gで3位以上と位置付けた）
- C8：人生で収入や財産が重要（Q2-10-hで3位以上と位置付けた）
- C9：人生で地位や名声が重要（Q2-10-iで3位以上と位置付けた）
- C10：人生で社会への貢献が重要（Q2-10-jで3位以上と位置付けた）
- C11：人生で子育てが重要（Q2-10-kで3位以上と位置付けた）

D. 将来構想

- D1：将来は経済的に不安（Q2-12で「強く感じている」か「やや感じている」を選択）
 - D2：将来は結婚したい（Q4-1で「いずれ結婚するつもり」を選択）
 - D3：将来は子どもが欲しい（A4-4で「子供は欲しい」を選択）
 - D4：今の家庭が理想的（Q4-12で「思う」を選択）
-

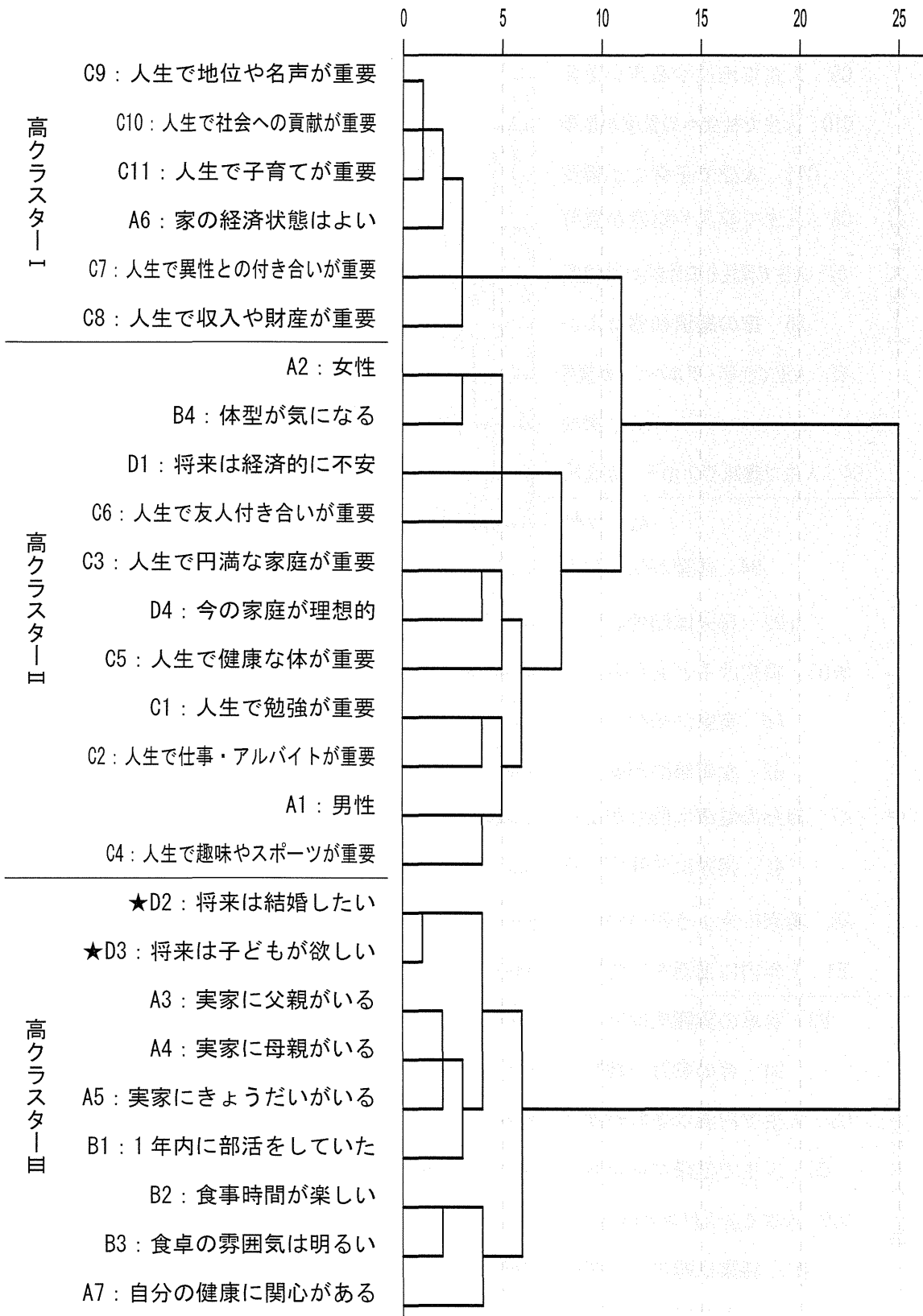


図1 高校生のクラスター分析のデンドログラフ

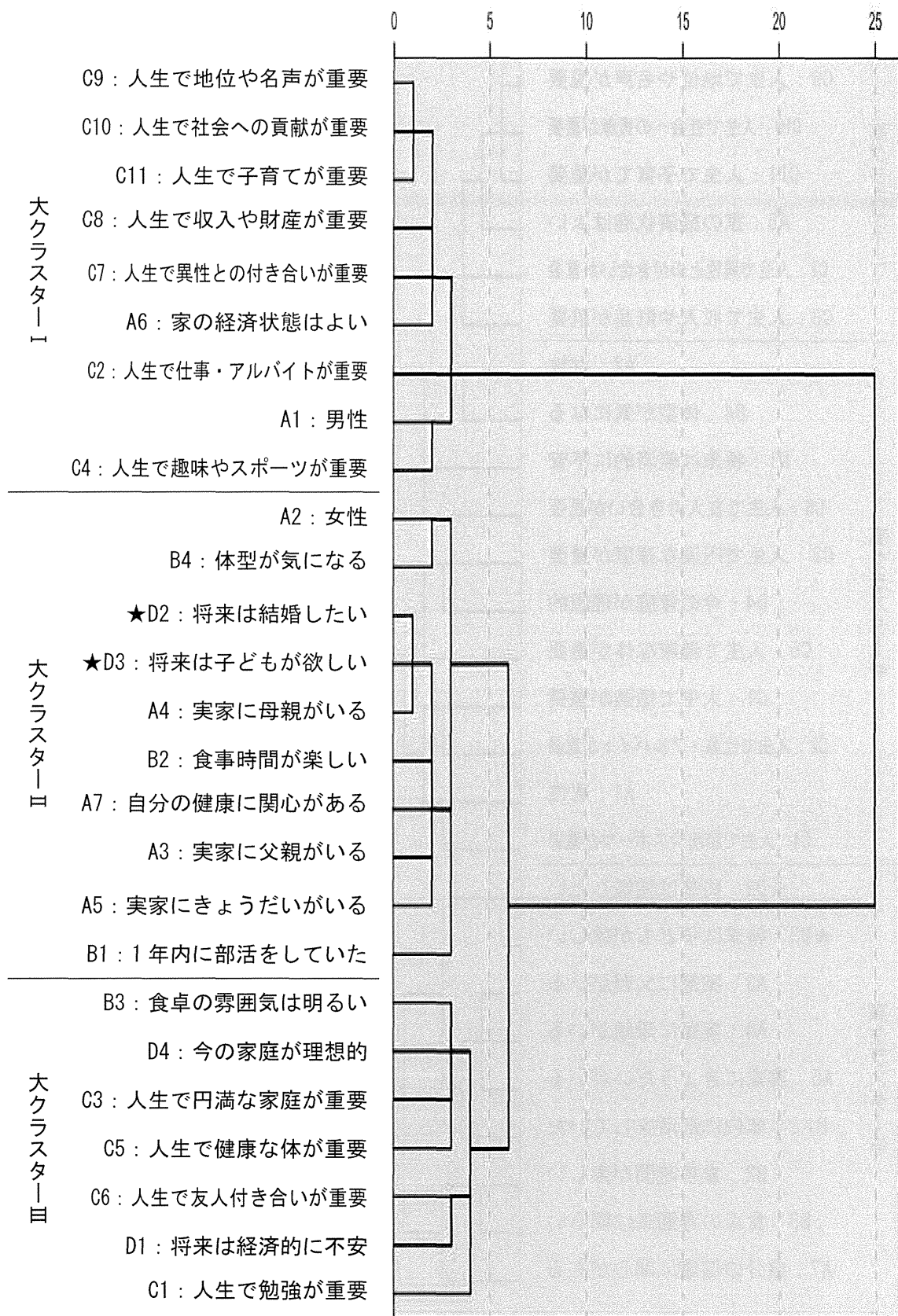


図2 大学生のクラスター分析のデンドログラフ

D. 考察

1. 高校生と大学生との比較結果について

各項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、26項目中21項目で差があった。データが千人以上と多いために、微細な差を抽出した可能性はある。しかし、これほど多くの項目で差が認められたということは、高校生と大学生とでは整理データで異なる傾向を有していると考えられるべきであろう。そのため、高校生と大学生を分けてクラスター分析を行う意義は、十分あると考えられる。

本研究が着目する「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」でも、高校生と大学生とで差が認められ、高校生よりも大学生で有意に多かった。この結果は、人生経験を積み、特に心理的な成長をするにつれ（高校生から大学生の間で肉体的な成長は、心理的なそれほどには顕著ではないだろう）、結婚と子どもをもつことに積極的になる可能性を示唆しているのかもしれない。

2. 高校生のクラスター分析結果について

高校生の整理データをクラスター分析によって検討した結果、3つのクラスターが得られた。

まず、《高クラスターⅠ》内の項目を見ると、地位や社会や経済や収入に関するものが多かったため、社会観に関するクラスターと理解できる。また、《高クラスターⅡ》には両性別が含まれるとともに、健康や自らの家族への態度と関連する項目が多かったため、健康観・家族観に関するクラスターと考えられる。さらに《高クラスターⅢ》には本研究で着目する「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」、および家族・家庭の状況に関する項目が多かったため、最も注目されるべきクラスターであった。この《高クラスターⅢ》で「D2: 将来は結婚したい」および

「D3: 将来は子どもが欲しい」と、家族・家庭の状況に関する項目がまとまりとして見出されたということは、これらに強い関連があることを示唆している。したがって、もし高校生に「結婚したい」や「子どもが欲しい」との動機付けを行う介入をするのであれば、あるいは「結婚したい」や「子どもが欲しい」の想いを実現できるよう教育的介入を実施するのであれば、個人の家族・家庭状況を踏まえる必要がある。

ただし、本結果の読み取りには注意を要する。「父母がいる」、「きょうだいがいる」、「食事が楽しく食卓が明るい」ということと、「結婚したい」および「子どもが欲しい」との関連は認められたが、そこに如何なる因果関係があることを先の結果は示してはいないからである。この点にわざわざ言及しなければならないのは、統計結果の読み込みに慣れていない者は誤った認識を抱いてしまうため、そして本テーマに敏感な者は的外れな点に批判することが懸念されるためである。つまり例えば、父母がいない者は「結婚したい」や「子どもが欲しい」とは思いにくい、ということを示唆している。

本結果が示しているものは、心理学的には、高校生が抱く「結婚したい」や「子どもが欲しい」という思いは、その者の家族・家庭という内的な対象関係と強く関連しているということであって、それは必ずしも現実の人間関係とは一致しない。配偶者と子どもという存在は、自らの家族のことであるので、それらを望む者が現在の家族に関心を強く持ち、家族にポジティブな思いを抱いていることは自然なことであろう。

なお、本結果で興味深い点は、《高クラスターⅠ》と《高クラスターⅢ》が大きく離れていることである。すなわち、「結婚したい」や「子どもが欲しい」という思いと社会観とは、統

計的に遠い関係にある。この解釈には際してはさまざまなことが考えられるが、まず、自らが家庭を持つということと、社会に出るということが、多くの高校生にとっては相反する関係にあるのかもしれない。社会が自らにとって外部、家庭が自らにとっての内部という関係にあるとすれば、高校生はこの両者を自身の内に抱えるまでに成熟していない可能性がある。これはある意味当然のことである。なぜならば、高校生で一人暮らしをし、自ら生計を立てている者が少ないことから、たいていの高校生は家族と現実的に強く結びついており、社会を直接経験するまでには至っておらず、社会へ進出するのはこれからの心理学的課題になっていると考えられるからである。したがって、先程の内と外という関係で見れば、高校生が社会への関心を持つということは、ともすれば、結婚や子どもをもつこととは別方向に進むことなのかもしれない。これは、結婚と子どもを持つことに関するプロモーションプログラムを高校生に対して実施する際の、留意点となるだろう。結婚と妊娠と就職は、どれも等しく人生の重要エピソードになるからである。

3. 大学生のクラスター分析結果について

大学生の整理データをクラスター分析によって検討した結果、3つのクラスターが得られた。

最初の《大クラスター I》は、高校生の《高クラスター I》と類似するが、さらに男性が加わり、趣味や仕事に関する項目もまとまっている。一般的な意味での「男性らしさ」に関わる項目が集まったクラスターであると考えられる。《大クラスター II》には女性や「D2: 将来は結婚したい」や「D3: 将来は子どもが欲しい」が含まれ、そして家族の状況に関する項目がまとまった。《大クラスター I》と対比す

るならば、これは「女性らしさ」と関連があるクラスターかもしれない。《大クラスター III》は《大クラスター II》と統計学的に近似関係にあるものの、現実的な環境の項目が多く位置づけられた。

大学生のクラスター分析結果の特徴は、《大クラスター I》と《大クラスター II》が峻別された点である。《大クラスター I》が示唆するように、男性は社会と自分自身に多く目を向けている。「C11: 人生で子育てが重要」が含まれたのは、以前よりも男性が育児に参加するようになり、「イクメン(育児を積極的に率先して行う男性)」という言葉がメディアで度々取り上げられている現状を想起させる。一方、《大クラスター II》からは、女性が家族・家庭へと目が向け、自らの結婚・妊娠を意識していることがうかがわれる。高校生と対比して考えると、大学生になると男性は自らの外部や社会への意識が向上し、かたや女性は自らの内部や家族への意識が向いていると読むことができる。以前よりも女性参画や女性の活躍が強く謳われるようになり、実際に企業等で実力を発揮している女性が増えてはいるものの、大学生によっては未だに、男性は家の外へ、女性は家の内へ、という志向性が根強く残っているのかもしれない。

E. 結論

現代の若者が抱く「結婚したい」「子どもが欲しい」という思いが、彼／彼女たちの如何なる現状や未来観、家族観と結びついているかを検討し、いくつかの仮説を導き出した。本稿は、明確な実証を目的とはしていないが、今後、若者たちが「結婚したい」「子どもが欲しい」という思いを実現していくことを、教育的介入によって支援することを目指すならば、年齢と性差は重要な要因になることが示された。したがって、

平成 26 年度に実施した DVD 教材と教育パンフレットによる効果を検証する際には、年齢と性差を分けて検討していくべきであろう。

【引用文献】

- 1) 山本眞由美研究代表. 若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究. 厚生労働省科学研究費補助金政策科学総合研究事業, 平成 25 年度総括・分担研究報告書. 2014.

F. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的 QOL、及び過去の食体験の関連について

研究分担者 林 芙美(千葉県立保健医療大学健康科学部)

研究協力者 武見 ゆかり(女子栄養大学栄養学部)

佐藤 ななえ(盛岡大学栄養科学部)

【目的】若い男女における現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的 QOL(以下、SDQOL)、及び過去の食体験が、将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と関連があるか検討すること。

【方法】平成 25 年 12 月～翌年 3 月までに、全国 17 施設の高校生・大学生を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。回答が得られた 3,055 名のうち、本研究の解析に用いたデータに不備のない者 2,360 名(高校生 1,400 名、大学生 960 名; 男性 1,111 名、女性 1,249 名)を分析対象者とした。結婚や子どもを持つことに対する意識と食知識、食態度、食習慣、SDQOL、及び過去の食体験との関連を検討するため、基本属性(年齢、学校区分、地域)及び将来における経済的不安感を調整した多重ロジスティック回帰分析を男女別に行った。

【結果】「いずれ結婚するつもり」と回答した者は男性 74%、女性 87%、「子どもは欲しい」と回答した者は男性 85%、女性 91%で、男女間に有意差が認められた。男性では、栄養バランス、SDQOL が良好である者は結婚・子どもの両方と関連していた。女性では、SDQOL のみ結婚・子どもの両方と関連があった。葉酸摂取時期の適正な知識は男女とも結婚のみ関連が見られた。また、過去の食体験は、性別に関係なく結婚・子どもの両方と関連していた。

【結論】現在の食生活や過去の食体験が良好であることは、将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな態度と関連している可能性が示唆された。

A.研究目的

近年、若年男女の結婚意識が消極化していることが、2010 年に国立社会保障・人口問題研究所が実施した出生動向基本調査により報告されている¹⁾。しかし、結婚することの具体的な利点として、男女とも「子供や家庭を持てる」を挙げる者は増加傾向にあることから、結婚意欲は出産意欲等の家族形成意欲と強く結びついていると考えられる。

また、若者は、理想としては子どもを 20 代に第 1 子を生み、トータルで 2～3 人は子どもを持ちたいと考えている。しかし、平均出産時年齢の高齢化や経済的な要因により、希望する妊娠・出産が

出来ていない現実がある。そこで、どのように希望するライフコースを実現していくかを後押しするために、適切な出産や子育てについての理解を深め、出産・育児に対する自信を高めていくための効果的な支援の提供が、現在の少子化対策において重要な課題となっている。

さらに、若年女性のやせが、低出生体重児のリスク等と関連していることも指摘されているため、望ましい栄養状態と食行動の実現に向けた、必要な知識の修得、望ましい食態度の形成、その実現に必要なスキルの修得は、妊娠・出産・子育ての希望が実現できる社会にむけて必要な要素の 1 つと考える。

小林²⁾によると、未来の家庭的食事に対する意識を高めるには、現在の食習慣が重要であり、過去の食体験は、現在の食習慣を介して未来の家庭的食事に間接的に影響していることが報告されている。しかし、現在の肯定的な家族形成意識と、現在あるいは過去の栄養・食生活の関連については報告がない。

そこで、本研究では、若い男女における現在の食知識、食態度、食習慣、食に関する主観的QOL(以下、SDQOL)、及び過去の食体験が、将来の結婚や子どもを持つことに対する前向きな意識と関連があるか検討することを目的とした。

B. 研究方法

平成 25 年度に高校生・大学生を対象に行った『若い男女における結婚・出産についての意識調査』(資料 1)のデータを用い、二次解析を行った。

1. 分析対象者

平成 25 年 12 月～平成 26 年 3 月までに、全国 17 施設の高校生・大学生を対象に無記名の自記式質問紙調査を実施した。回答が得られた 3,055 名のうち、本研究の解析に用いたデータに不備の無い者 2,360 名(高校生 1,400 名、大学生 960 名;男性 1,111 名、女性 1,249 名)を分析対象者とした。

2. 調査項目

本研究に用いた項目は以下のとおりである。

1) 基本属性

対象者の基本属性として、性別(男女)、学校区分(高校、大学)、地域(施設)を用いた。

2) 将来の経済的不安感

「あなたは、これから先 10 年間の自分自身の生活について経済的な不安を感じていますか?」という質問に対して、「強く感じている」「やや感じている」「どちらともいえない」「あまり感じていない」「全く感じていない」の 5 肢で回答を得た。解析では、「やや・強く感じている」「どちらともいえ

ない」「あまり・全く感じていない」の 3 区分に対象者を分類し、分析に用いた。

3) 将来の結婚、子どもを持つことに対する意識

将来の結婚に対する意識は、「あなたの結婚に対する考えを教えてください。自分の一生を通じて考えた場合、最もあてはまるものひとつを○で囲んでください」との質問に対し、「いずれ結婚するつもり」「一生結婚するつもりはない」「考えたことがない」の 3 肢で回答を得た。解析では、「いずれ結婚するつもり」とそれ以外に回答者を分類し、分析に用いた。

子どもを持つことに対する意識は、「あなたは、将来、子供が欲しいと思っていますか? 現在の気持ちに近い方のいずれかを○で囲んでください」との質問に対し、「子供は欲しくない」「子供は欲しい」の 2 肢で回答を得た。

4) 葉酸摂取に関する食知識

葉酸摂取に関する食知識として、「葉酸不足のリスク」「葉酸の摂取時期」の 2 項目を把握した。

「葉酸不足のリスク」は、「葉酸という栄養素(ビタミン)の摂取不足を予防することで、お腹の中の赤ちゃんに起こる神経管閉鎖障害という病気の危険度を下げると報告されていることを知っていましたか?」という質問に対して、「知っている」「聞いたことはあった」「知らなかった」の 3 肢で回答を得た。解析では、「知っている」とそれ以外に回答者を分類し、分析に用いた。

「葉酸の摂取時期」は、お腹の中の赤ちゃんに起こる神経管閉鎖障害という病気の危険度を下げるために、加工食品などに添加されている葉酸(プテロイルモノグルタミン酸)を付加的に 400 μ g/日とることが推奨されていますが、いつ頃とるとよいと思いますか?」との質問に対して、「妊娠前のみ」「妊娠前から妊娠後 3 ヶ月間」「妊娠後 3 ヶ月間のみ」「妊娠中、全期間を通じて」「その他」「わからない・知らない」の 6 肢で回答を得た。そのうち、適正摂取時期である「妊娠前から

妊娠後3ヶ月間」とそれ以外に回答者を分類し、分析に用いた。

5) 現在の食態度

現在の食態度は、「料理の楽しさ」「料理への自信」の2項目を用いた。

「料理の楽しさ」は、過去6ヶ月間を振り返り、「料理をするのは楽しい」との質問に対して、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば当てはまらない」、「当てはまらない」の5肢で回答を得た。解析では、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した者を「楽しい」とし、それ以外の者は「それ以外」と回答者を分類し、分析に用いた。同様に、「料理への自信」は、「料理することに自信がある」という質問に対する回答を、「自信があり」と「それ以外」に回答者を分類し、分析に用いた。

6) 現在の食習慣

現在の食習慣は、「栄養バランス」「野菜料理」の2項目で把握した。

「栄養バランス」は、「あなたは、1日のうち、主食(ごはん、パン、めん類等)・主菜(卵、肉、魚、大豆、大豆製品等が主体のおかず)・副菜(野菜、海藻、いも類等が主体のおかず)のそろった食事をどれくらいとっていますか？最も当てはまるものひとつを○で囲んで下さい」との質問に対して、「1日に2回以上」「1日に1回」「週に4~5日」「週に2~3回」「週に1回以下」の5肢で回答を得た。健康日本21(第二次)では、「主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を1日2回以上の日がほぼ毎日の者を割合の増加」を目標に掲げていることから、解析では「1日2回以上」と「1日1回以下」に回答者を分類して用いた。

「野菜料理」は、「あなたは、平均すると1日に野菜料理(野菜を主な材料とした料理)を何皿ぐらい食べていますか？1皿は小鉢1コ分程度と考えて下さい。野菜ジュースは含めません。過去

1ヶ月をふりかえって、あてはまるものひとつを○で囲んでください。」との質問に対して、「ほとんど食べない」「1~2皿」「3~4皿」「5~6皿」「7皿以上」の5肢で回答を得た。食事バランスガイド(厚生労働省・農林水産省)では、野菜料理の目安を5皿程度としていることから、「1日5皿以上」と「1日4皿以下」に回答者を分類して用いた。

7) 食に関する主観的QOL(SDQOL)

SDQOLは、會退ら³⁾の4項目からなる尺度を用いて把握した。SDQOLは、①食事時間が楽しい、②食事の時間が待ち遠しい、③食卓の雰囲気は明るい、④日々の食事に満足している、の4項目からなり、信頼性・妥当性が確認されている。回答はそれぞれの項目に対して「当てはまる」(5点)、「どちらかといえば当てはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「どちらかといえば当てはまらない」(2点)、「当てはまらない」(1点)とし合計得点を算出した。解析では、中央値(16点)以上と中央値以下に回答者を分類し、分析に用いた。

8) 過去の食体験

過去の食体験は、「あなたの小学生の頃の食生活を思い出してみてください。自分の家は、食事が楽しく心地よかったという印象を持っていますか？」との質問に対して、「持っている」「どちらかといえば持っている」「どちらともいえない」「どちらかといえば持っていない」「全く持っていない」の5肢で回答を得た。解析では、「持っている」「どちらかといえば持っている」を「楽しく心地よかった」とし、「どちらともいえない」「どちらかといえば持っていない」「全く持っていない」を「それ以外」として回答者を分類し、分析に用いた。

3. 統計解析

検討に用いた項目について、男女及び学校区分間で χ^2 検定を用い記述的な検討を行った。さらに、結婚や子どもを持つことに対する意識と食知識や食態度、食習慣、SDQOL、及び過去